



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

奉献文の叙唱前の対話句が3対に

司祭「主は皆さんとともに」

会衆「またあなたとともに」

司祭「心をこめて」

会衆「神を仰ぎ」

司祭「賛美と感謝をささげましょう」

会衆「それはとうとい大切な務めです」

「祭儀全体の中心であり頂点」(※1)である**奉献文**(エウカリスティアの祈り)は、叙唱前の司祭と会衆との対話句から始まります。現行版では「主は皆さんとともに」「また司祭とともに」「心をこめて神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげま

しょう」という2組の対話句でしたが、今回の改訂では、ラテン語規範版にあわせて、表記のような3組の対話句へ変更されます。

2対目の司祭「心をこめて」会衆「神を仰ぎ」は、ラテン語の本来の意味では司祭「心を上に」会衆「主のそばへと持っていくきましょう」であり、司祭はこの箇所を広げている両手を上に挙げます。祭儀の頂点に向けて私達の心が天上へと高まっていくのを意識したいところです。日本語では現行版の訳をそのまま生かしたものが採用されています。「心をこめて」という内的な動きと、「神を仰ぎ」という外的な動きによって、神の内在性と超越性が表現されており(※2)、この日本語にも、いよいよ神とつながっていく私達の心の高まりを乗せていくことができるとができるでしょう。

ところで、ミサの中心であり頂点である祈りが「**奉献文**(エウカリスティアの祈り)」と呼



ばれる意味を考えてみましょう。奉献文は、今回取り上げている叙唱前句から始まり、その終わりは司祭が聖別されたパンとぶどう酒を高く掲げて唱える栄唱(「キリストによってキリストとともにキリストのうちに…すべての誉れと栄光は世々に至るまで アーメン」)です。奉献文はその名の通り、信者の集まり全体が自らをキリストに結び合わせて生け贄を奉献するための祈りなのです。『ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)』78には、「一同は尊敬と沈黙をもって奉献文を拝聴しなければならぬ」と書かれています。ミサが何より犠牲祭儀であり、キリストがミサの犠牲のうちに現存している(※3)ことを思い起こし、尊い犠牲への感謝(エウカリスティア)を込めて奉献文を拝聴いたしましょう。

※1 『ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)』78

※2 カトリック中央協議会『新しい「ミサの式次第と第一」第四奉献文」の変更箇所』35頁参照

※3 第二バチカン公会議『典礼憲章』7参照